

4.洪水時の避難、救助

低い土地や、堤防近くの土地にお住まいの方は、警戒レベル3で避難の準備や避難を始める必要があります。避難のための防災情報は、市町村の防災行政無線、広報車やテレビ、ラジオ、パソコン、スマホなどいろいろな機器から得ることができます。しかし、なぜか逃げ遅れたり、避難そのものをしなかった人がいて、大きな被害が発生します。他人の支援がなければ避難できない人は別として、自分で動けるのに、どうして？と思うような行動をとる人がいるのはどのようなことなのでしょう？正確な情報があり、避難の勧告も出されている状況では、人間の心理状態にその原因を求められないのでしょうか。

人の心理には、いろいろなバイアスがあるといわれます。よく言われるのは「正常性バイアス」です。事態を自分に有利に解釈して、自分は大丈夫だと思いついてしまうことです。災害時の心理学では、正常性バイアスは二つのバイアスを含むとされています。一つは同化性バイアス、もう一つは同調性バイアスです。同化性バイアスは環境の変化が少しずつだと気が付かないうちに、事態が進展して気が付いた時には手遅れになるということです。同調性バイアスはみんなが逃げないから動かないでおこうというような、集団の行動に従ってしまうバイアスです。これとは別に、オオカミ少年効果というものもあります。嘘をついて面白がっていたが、本当の時には誰も助けてくれなくて、オオカミに食われてしまったというものです。災害の警報の空振りなどによく言われます。このように多くのバイアスがあり、私たちはリスク情報を素直に受け取れないといことに注意が必要です。どんな人にも何らかのバイアスが働きます。このようなバイアスが必ず働くのだという考えをもって行動しないと、避難のタイミングを失したり、いのちを失うことになりかねません。

このようなバイアスによる行動の制限に打ち勝つ方法は、「行動のパッケージ化」(木村玲欧)です。事前に作成した行動計画で、認知→判断→行動という一連の流れを短時間で行うことです。つまり、「こういう場合は、こういう行動をとる」というルールを自分の中に決めておけば、警報レベルでいちいち考えて避難のタイミングを失することがなくなるということです。一例をあげましょう。風水害の場合、「レベル3」で心のスイッチを日常から非日常に切り替えることです。行動としては、避難に持ち出す懐中電灯や非常袋を玄関に置く。テレビ・ラジオ、スマホ、パソコンなどで情報収集を行う。ハザードマップで浸水・土砂災害の危険性のある場所、避難所の確認をする。玄関付近で雨具や長靴などを確認する。家族への避難や避難場所の周知、連絡。また、戸外の状況によっては、危険と思われる場合は、その場にとどまるなどの判断を行うことが重要です。避難には時間がかかりますので、その間の変化を想定する必要があります。